

「テレビは箱庭、演技は仮面、グラビアは天命です」

壇蜜さんと齋藤支静加（壇蜜さんの本名）さんのオンとオフの切り替えはどんな感じなのでしょう。もしかしたら壇蜜さんとも齋藤支静加さんとも違う、素のキャラクターが別にいらっしやるのではないかと感じていたのですが。

「いちおう齋藤支静加として生きてきて、こうだったらいなといった変身願望をかなえてくれたのが壇蜜です。でも齋藤支静加と壇蜜は根っこは一緒です。少しサバイバル精神が旺盛で、ちよっとエッジなグラビアなんだろうね。齋藤支静加は壇蜜ほどパフォーマーではないかな。自分のすごく若い部分を持っている存在もなきにしろあらずです。たまにたずら心を出したり、面白いことをやりたいという好奇心旺盛な部分を持つ自分が別にいるのかもしれない」

壇蜜さんのエッセー「蜜の味」によるとグラビアを撮られる時は開き直りの心境だと。

「まずは全部みせて、カメラマンの撮りたいモノに従って、そこから感情をひっぱって行く感じです。自分が考えたり自分で演出した内容が男性の心に響くかといった、たぶんちがうと思います。女性が創ったものは女性が創るカテゴリーから抜けられないから。男性に対してより強く響くものは男性にしか創れないですよ」

もともと男女はお互いに理解できないものだともおっしゃっていますね。

「絶対理解できないですね。深く付き合ったら理解できる部分もあるかもしれないが、女性同士だってそんなに分か

り合えないのに女性と男性が分かり合えることはまずないと思います。だから仕事は『餅は餅屋』の精神でいいと思います。男の仕事は男に任せる。あくまで自分は裏方です」

意外にも自信がないとも書かれていますが。

「自信はないですね。自信を持つたらかそこが崩れていきそうです。常に何かに困っていないといけないものはできないと思っています」

仕事の内容によってキャラクターや表現は変えているのですか。

「テレビ、演技、グラビアって、それぞれ思っていること、こういう世界だということに私が思っているだけのイメージなんですけど。例えばテレビは箱庭であり、舞台や演技は仮面です。グラビアは自分にとって天命でありたいと強く思っています」

天命ですか。壇蜜さんにとってグラビアは別格なんですね。

「グラビアはそこだけ切り抜いて考えると、限定的な生の中で本当に限定的な瞬間のことです。自分の肉体が生きている時間は、とても短く、はかないものです。だから大事にしたいんです」

壇蜜さんが漂わせているのはかなさや、危うげな魅力というのはその辺からきているのでしょうか。

「そうですね。執着してないんだと思います。ただ今この瞬間の自分の生をずっと生きているだけなので。なんだろう、いつもきらきらしていたいという感情はないですね」

「文壇デビューで可能性を証明したい」

ところで、いろいろな資格をお持ちですね。さまざまな仕事の経験もありなようです。なぜ転職を繰り返されたのですか。

「不真面目というか勤勉さに欠けていたんだと思います。実家に住んでそこそこ裕福な暮らしをしていて、母親と知人と3人で和菓子屋を開くという事業を計画していたのですが、知人が亡くなって、その将来の目標を失ってしまった。知人が亡くなってからは何となく気持ちも不安定で抜け殻状態が続きました」

相当のインパクトだったんですね。現在はどうなんですか。

「時々そういう気持ちになる時もあります。しかし今は、グラビアの仕事や、自分が書いた原稿のチェックのために夜遅くまで起きていることが多くなりまして。そういうことのために労を惜しまない自分になります。たぶん今の仕事が好きなんですよね」

将来、こんな仕事をしたいといった具体的なイメージはありますか。

「そうですね。しいていえば文壇の仕事でしょうか。とういて受け入れてもらえないと思いますが、芸能人がちよっと小説を出してその後、文壇で生きながらえたというようなことは少ないと思います。だから今後、コラムなどの連載を地道に続けて行って、文壇の人たちに目置いてもらえるような存在になりたいと思っています。そのためには、長い時間をかけても悔いはないと思っています」

そういえば以前雑誌のインタビューで「ご自身の行きつく先は文化人か、火あぶり」という話をされていましたね。

「やはり文化人であるなら、ちゃんと確立した世界観を持つようにしないといけない」と考えています。壇蜜の持つ世界観が文化人としてちゃんと世に出るかわからないかは紙一重だと思いますから」

いずれ文壇デビューを考えているということですね。

「うーん。試してみたいですね。証明してみたいです。32歳の私が、グラビアだけでなく、ある通販サイトのDVD販売枚数で1位になったりと、いろいろな証明はてるんですよ。絶対無理でしょうって、みんながばかにしていたことをじわじわ証明していくというのはタークホースならではだと思えます。「ミス何々」などの冠も何もない29才の新人は相当苦労しますよ。門前払いです。だから可能性を証明したいのです。自分がその一例になって、女性の生き方の選択肢にもなれて、男性の欲求が満たされればそれでいいんです」

女性にも人気ですね。なぜだと思えますか。

「うれしい誤算ですね。幸せそうじゃないからでしょうか。本当に幸せな人か本当に不幸な人じゃないと女性はおこがれないと思います。はつきりとした偶像のようにシンボライズされてないと崇拜にくだいしょう」

壇蜜さんが仕事をやる上でいつも心がけていることはありますか。

「他人の悪口を言わないことです。プライベートでも企画の仕事でも絶対に断ります。次の仕事がなくなっても人から恨まれるほうがよっぽど怖い。生きていく人間ほど怖いものはないですから」

壇蜜さん インタビュー



「趣味や仕事に打ち込む姿は色あせない」

壇蜜さんの生き方や仕事への姿勢にも魅力を感じている人が多いと思います。

「どんな仕事に対してもネガティブな感情はあまり持っていないですね。出会った仕事に対しては向きに、それをこなし、取り組もうという気持ちで先に起きますから。とりあえず取り組んでみて、受け入れてみて、そして自分でできたと思ったらそれはきつという評価を出せばいいと思います。最初からネガティブに捉えてはいけない気がします」

読者であるビジネスパーソンに対してメッセージはありますか。

「まず皆さんがどんなことにお悩みになっているのか、どんな仕事をされているのか、もう少し聞いてからお話をしたいです。父親もサラリーマンですけど、離れて暮らしているのだから仕事なのかよくわからず、自分自身もOLという経験がほとんどありませんでした。会社という大きな組織に属する人たちの人生観とは、どういものなのか知りたいですね。どうい仕事に取り組んでどうい時に喜びを感じたり辛いと思うのか興味があります」

分らない世界ですが、

「ただ、私は仕事については、誰に聞かれても、こういう仕事をしていますって簡潔に答えられる人のほうが好きだと思います。自分がやっていること、取り組んでいることを離れた目線で見ることもできる人に魅力を感じます。趣味にしろ、仕事にしろ男性がはまって熱を入

れる姿はいつまでも色あせないですね。男性は打ち込めることがあってそれに集中できる。それが男性の特権だと思います」

ところで、調理師の資格をお持ちですよね。「食」に関してはどんな思いがありますか。

「食べることの快楽は善であり悪であると思っています。人は食べることの快楽はなかなか我慢できないです。作る側の良い気持ちも悪い気持ちもすべて作られる料理に反映してくると思います」

家ではどうい料理をされるんですか。

「最近は結構簡単になりました。やはり誰かのリクエストがあった時が一番腕を振るえます。カレーは好きですね。以前は料理に関する連載を持っていた時、リクエストがあつてカレーを作ったんですけど、スタッフや周りの人から喜んでました。いっぺんになくなってしまうってうれしかったです」

KATSUにちなんだ質問します。

「げんをかつぐ」という意味で、壇蜜さんにとってのラッキーアイテムはなんですか。いつも持ち歩いているものとかありますか。

「ハンカチって2枚持っていると交友関係が広がります。理由は何もありません。何か意味があるんでしょうね。自分の中のスイッチなんだろうな」



【KATSU春季号 読者プレゼント】

壇蜜さんのサイン色紙、サイン本を各1人にプレゼントします。

①希望の品②〒住所③氏名④年齢⑤電話番号⑥職業⑦本紙面の感想⑧今後取り上げてほしい企画 を記載し、下記電子メールアドレス「KATSUプレゼント係」宛てにご応募ください。(締め切り5月31日)

当選は発送をもって代えさせていただきます。ご記入いただいた情報は、日刊工業新聞社が細心の注意を払って取り扱います。
katsu@media.nikkan.co.jp

だん・みつ グラビアアイドル、タレント、女優。1980年、秋田県生まれ。大学卒業後、いくつかの職業を経験。2010年グラビアデビュー。雑誌、テレビ、映画など幅広く活躍。13年2月エッセー「蜜の味」(小学館)を出版。主演映画「私の奴隷になりなさい」(ブルレーイ&DVDが発売)。日本舞踊師範、英語教員免許、調理師免許などの資格を持つ。公式ブログ「黒髪の日拍子」が人気。好きな食べ物はいすけケーキ。